石炭政策の具体化
人命無視の合理化
宮浦における配転

三井鉱山は石炭政策にもとづき昭和四十二年一月～二月までの間に、長期計画にもとづく具体的な合理化としての実施計画を提案しようとしている。

三池としての基本的構想は、

(イ)昭和四十五年で能率一人あたり（月）七十トン～七十五トンにしたい。

(ロ)人員計画は自然減耗、無補充方針とし、昭和四十五年以降は鉱山学校卒者のみを新規採用。

(ハ)掘進計画は昭和四十五年度までは横すべり、組夫掘進も横すべりでいくが、本鉱員の能率アップ分は組夫暫減（一応四十五年で三池の骨格完了）

(ニ)第三人工島をつくり坑内通気改良。

という、より安い費用で、より多く生産しようとする第四次合理化計画である。

宮浦選炭機を廃止して配転

合理化計画に基づく具体案として、宮浦選炭機の手選部門を昭和四十二年一月から廃止し、余剰人員は配転しようというものである。

手選部門は多人数を要し、品質が不安定、設備が老朽化していることを理由に縮少し、将来は全部廃止し、石炭は三川選炭機に集中する計画である。

人員は、現在の七十名を来年中の停年退職者五名を含む二十九名を残して配転しようというものであり、坑内配転希望者を募集し残余を三川選炭係（十四名）と坑外雑作業へ配転するというものである。

ところが坑外雑作業は、現在より三池労組で七千円くらい、第二組合で二万円くらいの減收となる。

採炭関係の配転

三池炭鉱における基本的な採掘計画は二百メートル以下は払採炭方式、炭丈三・六メートル以上は分層払とし、柱房小切羽採炭を逐次減少させていく計画である。

宮浦では当面

(イ)四十一年十一月、五十卸小切羽の終掘に伴う採炭工全員四十名を分層払採炭工へ配転する。

(ロ)四十二年一月～二月、四十昇終掘に伴う採炭工全員十名を動枠工へ配転する。

というものである。

掘進の増員

五十卸が終了時点の四十一年十一月末に二十名、四十二年二月に十五名の掘進を増員というものでこれは間接部門から配転し直接部門を強化するものである。

三井の姿勢は変らぬ

今回の配転はいずれにもみられるように、採炭を機械化し少い人員で生産をあげようとするのが会社のねらいであり、配転は常に高收入の職種から低收入の職種への配転には人員の枠づけを行い、その逆の場合は第二組合優先の態度をとっている。

これは三井が〝人殺し合理化〟攻撃の基本的な姿勢をいささかも変更していないものである。

炭鉱に仂く
第一回青年の交流会

十一月二十七日、佐賀県の炭労五山（杵島、明治佐賀、立川、古賀山、西杵）に仂く、第一回青年労仂者集会が、西杵労組で約百名の仲間が集まり、いまの炭鉱情況でいかに青年が重要な立場に立たされているか、その役割を果たしているかどうか、各支部の実体を報告し、悩みを語ろうと開かれた。

管理炭鉱という合理化政策をおしつけられ、魅力にとぼしい職場約四百人の内、十人という青年層のうすさ、いくら仂いても嫁のきてのないような低賃金。毎日毎日パチンコ、競馬とせつな的なウサバラシをしている若人を、抵抗しなければ生命までも、小さな家庭の幸せすら、破壊するいまの世の中で、一人でも二人でもどうしたら仲間にしていけるかが、真剣に話しあわれた。

まだまだこれからが青年部の活動でしようが、佐賀県における炭労青年の集いが成功したことは、三池の反合理化、COのたたかいが、発展する火が広がったことだと思います。集会の最後に同じ条件の下で、苦しみ、悩んでいる仲間として、今後、活発な交流の波を高めていこうと、意志統一をし散会しました。

（三川・田中精一）

殺人犯が重役に就任

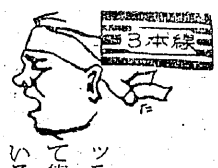
▼…妙なことで、いまの世のなかでは悪いことをやる奴ほど出世する。特に三井鉱山ではいっぺんに四百五十八人もの労仂者を殺し、八百人以上の人々をCO中毒という生き地獄のなかにつき落とした奴が、あれよあれよという間に重役になってゆく。三川大変災をひき起こした当時の三池鉱業所次長だった渡辺憲三（現港務所長）と池田弘（現取締）の常務就任の後から、こんどは当時の三川鉱長だった呉比長司が重役になってゆく。

▼…かと思うと現三池鉱業所次長の中村文平が同所長となったはよいが、そのいうことがふるっている――「まあ、よくできてる（第三次石炭合理化案のこと）。議論はいらん、安い石炭を出すことだ」。（朝日新聞三十日朝刊から）

▼…どこまで恐ろしい会社か。

趣味をめぐる ⑥
マッチのレッテルを集めて

四山　志垣　武男　さん



市井の生活が

「マッチのレッテルもこうして集めてみるといろんなものがありますね。そして当時の表にでない、普通の市民の風俗みたいなものがあるからおもしろいですよ」と志垣さんはマッチのレッテル集めの楽しさを語る。

レッテルを集めはじめて十年……。もう三千種以上集まっている。

集めはじめた動機は、知人が集めているのを見て、自分も思い出になるだろうと思ってはじめたという。

どこでも交流を

マッチを集めるのに、誰とでも話すそうである。マッチを通じて第二組合の人とも、各地からきたオルグの人とも。

「先日も、前に三池にオルグに来た人からマッチのレッテルが送ってきた」とうれしそうな顔で語る。

そうして集めたマッチは、種類別、職業別に分類し用紙にきちんと貼って整理されている。

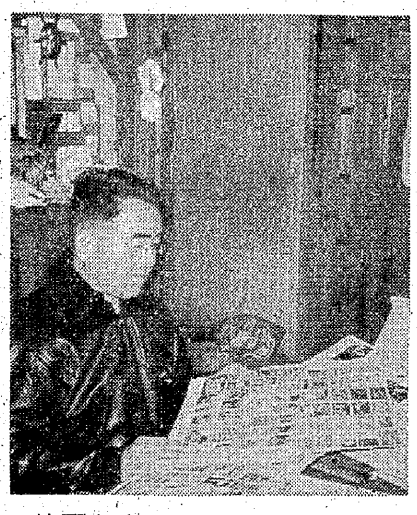
しばらく売り出された東海道五十三次も、江戸から京都まで宿場順を本でしらべ、順序ごとにならべて貼ってある。目でみる歴史の勉強にもなりそうだ。

集める楽しみ

志垣さんはマッチだけでなく新聞小説を切りぬいて集めたり切手も集めている。

「昔は記念切手売り出しの日には郵便局前にならんだりしていたが、最近はブームが下火になったのか、そうまでしなくても手に入るようになった」という。その切手集めも、いまは子どもさんが受けついで集めるようになったそうである。

「はじめはなんとなく集めていたのが、たまってくると保存のために整理を考えたり、楽しみが出てきます」と收集の弁。



整理したマツチのレツテルをながめる志垣さん

改めてその死を惜しみ
松本参議の告別式

故　松本治一郎氏

十一月二十二日、かねて病気静養中のところ不幸にして急性肺炎を併発、享年七十九才をもって逝去された故松本治一郎氏（参議院議員＝社会党）の告別式が、同月三十日午後三時から福岡の九電体育館で開催された。

故松本参議は明治二十年六月福岡市に生まれ、全国水平社中央委員長、初代参議院副議長などを歴任、部落解放運動に一生をささげた。

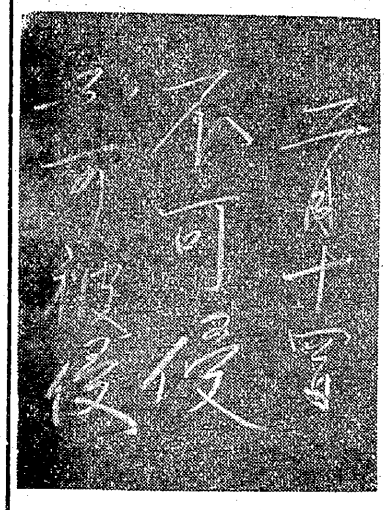
故松本参議のこんどの死がどんなに惜しまれたかは、告別式に一万人以上の参列者が集まったことがよく物語っているが、式もまた故人をしのぶ鈴木元社会党委員長をはじめ、幾多の人々の言葉や詩の朗読、合唱がささげられ、ひときは厳しゅくに行なわれた。

故松本参議は明治二十年六月福岡市に生まれ、全国水平社中央委員長、初代参議院副議長などを歴任、部落解放運動に一生をささげた。

衆院当選三回、参院当選四回。その間、人種民族差別反対国際大会にアジア代表として出席するなど、活動をつづけた。もともとわが国社会主義運動の、大先輩として大きな存在だった。

故松本参議はこんどの新去まで社会党顧問、日中友好協会会長、部落解放全国同盟中央委員長などの重任にあった。

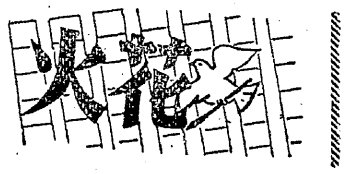
なおこんどの告別式に三池労組からは十一名が代表として参列したが、格別紙上を通じ心から哀悼の意を表したい。



故　松本治一郎氏の絶筆

三池と同じ
ムチウチ病に悩む私たち

京都　雨森市太郎



今回の政府・会社側の非人道的な労災補償の打ち切りに、断固抗議して立ち上がり闘って居られる三池のCO患者と家族の皆さん、炭労の仲間に、私たち交通犠牲者でムチウチ病に悩む患者を代表して心から激励の言葉を贈ると同時に、佐藤自民党に対して怒りをこめて抗議します。

一瞬にして四百五十八名の尊い労仂者の生命が奪われたあの大爆発は、私たち日本国民の忘れることのできない大惨事です。あれから早や三年、八百七十六名の人たちを会社はいつ治るともわからぬCO患者にしてしまった。

この大事故は自民党政府の石炭合理化政策と、保安法規をふみにじった三井大独占資本の生産第一主義によって引きおこされた人災です。この大事故の犠牲者に対する完全補償の義務と責任は、すべて政府と会社側にあるにもかかわらず、佐藤政府は人間尊重という言葉を裏切り、一方的に労災補償を打ち切り強行就労を通告しました。

同時に現在の交通戦争もまた、自民党政府の交通行政、道路政策の失策がひき起こしたものです。その犠牲者であるムチウチ病患者の私たちも、いつ治るともわからぬ不安をかかえながら、苦しい闘病生活を送っています。

ムチウチ病とは車の後部に追突された時、頸髄（首の骨）が強いショックで曲り、背髄を通う神経に至る損傷で、症状は〝頭痛〟〝目まい〟〝手のしびれ〟〝首が痛む〟〝耳鳴り〟〝全身がだるい〟などで、医学的にも新しい近代病で、現在では完全に治す治療方法がないため、多くの患者が肉体的・精神的に悩んでおります。

その矢先、三池のCO患者への今回の労災補償打ち切りを知り、京都の〝ムチウチ病対策協議会に結集する私たち三百五十名の患者は「明日はわが身」の合い言葉に、労仂者を犠牲にした独占資本に奉仕し、人間尊重という言葉を裏切った佐藤自民党政府に対し、労災補償打ち切りの即時撤回と、全治までの生活の保障を要求するものです。

今後共に交流を深めて共闘し、頑張りましょう。

昭和四十一年十一月十七日
京都ムチウチ病対策協議会
会長　雨森市太郎

×　×

【解説】　こんど突然いただいた手紙を紹介しましたが、ムチウチ病という耳馴れない交通災害で、ずいぶん泣いている人々があるようです。京都の患者の人々は協議会をつくって団結し、そのおかげで京都府議会が「ムチウチ病を職業病と認め、全治するまで労災保険の適用を打ち切らないこと」などの意見書を政府に提出するまでに発展しています。

なお協議会の住所は「京都市左京区川端通川上る　川端診療所内」